【講　座】

くせものがたり贅注 (2)

三沢諄治郎

（第六段）（書をよむは貧を招くため）

○昔翁ありけり。常のことに云へりけるは、書を読むは貧をまねくためなりと、あながちに云はれけり。螢のほかげ雪の光、隣の壁のこばれを頼むたぐひ多かりけり。都に浪華に、書籍あまた買ひ積みて持ちたりといふ人も、こがね千枚を費やせし人はいと稀なりとや。茶器などもてあそぶ人は、手に据ゑて見るばかりの物にも、それらの価ひなるは幾らも買ひ入れて持ちたるとや。このためし、今の世のみにあらず。源氏物語にいへる、「家より外に求めたる装束どもの、うちあはず、かたくなしき姿などをも、恥ぢなく、面持、声づかひ、うべうべしくもてなしつつ、座につき並びたる作法よりはじめて、見も知らぬさまどもなりし」と書きしは、おほやけに仕うまつる儒者たちの貧しきさまを見るに浅ましとていへるなり。また、田舎より上る書生は、国を出るより、人の世話にはなりうち、写本は盗むもの、書物は借り取りに返さぬものと、まづ覚えて来るなりけりと、或る師の語られし。

○（原注）螢を集めて書を読みしは車胤なり、雪の光をたのむは孫康、隣の家の灯をひきしは匡衡、いづれも貧人なり。

○（原注）源氏は乙女の巻なり。貧しきあまり、人のものを借り着しければ、ここかしこ丈合はず見苦しきを、われは何ともなげに作法ぶりて居ならびたるがをかしとなり。

○（原注）我が朝、学官の窮する由は、三善清行の意見封事の第四条に見えたり。

〔注〕①源氏物語＝少女の巻、源氏が長子の夕霧を大学に入れて学問させることに決心して、博士どもを召して、字つけの儀式を挙げさせる条に、

　字つくることは、東の院にてし給ふ。東の対をしつらはれたり。上達部殿上人、珍らしくいぶかしき事にて、我も我もと集ひまゐり給へり。博士どももなかなか臆しぬべし。憚る所なく、例あらむにまかせて、なだむることなく、厳しう行へと仰せ給へば、強ひてつれなく思ひなして、家よりほかに求めたる装束どもの、うちあはず頑しき姿などをも、恥なく、面もち、声づかひ、うべうべしくもてなしつつ、座に就き並びたる作法

より初め、見も知らぬ様どもなり。若き君達は、え堪へずほほゑまれぬ。

②或師の語られし＝この師の言葉は「田舎より」以下である。こうした句は江戸時代の文によく見る所で、往々、直接の言責を避けたり、一種の皮肉を目的としたりして、自分の意見を他人の説のように仮托することがあった。

〔補説〕①書を読むは貧を招くためなりとは、痛快な警句である。学問の純粋性を道破した此の翁は恐らく作者自身の影法師であろう。そして恐らく当時の世相に対する手痛い反語であるだろう。第二段にも見えている儒者の俗化をば、筆致をかえて皮肉にあざけったもので、殊に末段、田舎書生の不心得は、罵り得て頗る妙である。田舎者に対する都会人特有の潔癖さもまざまざと感ぜられて面白い。

②この文の拠り所とも見られるものに「蘭洲茗話」がある。これは宝暦十二年（1762）に死んだ大阪の儒者五井蘭洲の著であるが、その中に、

○或人の戯語に、人あり云ふ、読書学問は善きことなれど一の疵あり。身持をよくせねばならぬことなり。これ疵なりと云ふ。是によりて思ふに、今の学者は身持ちのよきを見れば道学先生とて笑ふ。これ人の望むところなり。又人あり云ふ。読書学問はよき事なれども一の疵あり、高慢になるが疵なり。読書すれば心ひろく成る故、おのれを知りて謙遜になるべし。高慢になるのは井の内の蛙の類なり。人又云ふ。読書学問はよき事なれども一の疵あり。貧乏になる、是れ一の疵なりと。読書学問すれば人々職業をつとむる事を知りて是れに安心して楽しむ心生ず。楽しむ境界にいたれば貧も貧ならず。貧しくなりて読書学問なき人は多くは賤しく偽る人となる。

と見えている。蘭洲の歿した年は秋成三十才であり、胆大小心録にも、

○段々世が変って、五井先生といふがよい儒者であった。

と賞めて居り、藤簍冊子にも、

○噫、文なん唐ざまは習はねばたどたどしきを、五井の博士の尻に立ちてまねび出たる、狗の尾継ぎたりとや、老のほれほれしくて、垣根にすだく秋の虫の、つづりいと見苦しくもさせるものか。

○昔、五井の何がしと云ひし難波人にも神のつきたれど、財乏しさに、なさばやと思ふつくりわざまをば、文に書きあらはして思をやりたるは、物しりて心の高きなり。

など繰返して敬意を表しているのなどから見て、前掲の書に暗示せられるところがあったのではないかと考えられる。

序でに、蘭洲の父、持軒という人は、もと医者であったが、或時方剤を誤って患者を死にいたしたことから発心して医を廃し、儒者となったという。（先哲叢談）。秋成が医者をよした事情およびその心事に共通している。或はこの事が秋成の決心に強い暗示となったのではあるまいか。

③原注に見える三善清行の意見封事（延喜天暦の頃政治の積弊を忌憚なく論じて上奏した密封の意見書）の第四条というのは「大学ノ生徒ノ食料ヲ加給センコトヲ請フ」と題し縷々その窮状を訴えた名文で、その中に、

○又、河内国両郡ノ治田ハ、頻リニ洪水ニ遭ヒテ皆大河トナレリ。又、常陸・丹後ノ両国出挙ノ稲ハ度々ノ交替ノ飲ニヨリテ本稲皆失ヒ、利稲アルナシ。当今遣ル所ノ者ハ唯大炊寮ノ飯料米六斗、山城国久世ノ郡ノ遺田七町ノミ。此ノ小儲ヲ以て数百ノ生徒ニ充ツ。薄粥ヲ作ルト雖モ猶亦周ネカラズ。……

是ニ於テ後進ノ者、偏ニ此等ノ群ヲ成スヲ見テ、即チオモヘラク、大学ハ是レ逃遁坎壈ノ府、窮困凍餒ノ郷ナリト。遂ニ父母相誡メ、子孫ヲシテ学館ニ閑セシムル者ナキニ至ルナリ。……

……（原漢文）

これに依って、大学の南北の講堂には雑草がはびこり、東西の宿舎はげきとして人無しと書いている。延喜天暦の世にありながら、学府の貧窮、真に驚くべきものである。

（第七段）（天下こぞりて茶の湯なる時代）

○むかし、一天下こぞりて茶の湯なる時代ありけり。その世の人は、郷党お茶なきには語らず、室お茶にあらざれば入らず、割截お茶にあらざればくらはず、道具書附けなきは買はず。すかさぬはお茶と称し、ぬかればお茶がないとそしる。よい女房は書院もの、いけぬ妾はさびもの、利休ばし、利休下駄。大工、中瀬、八百屋、魚屋も、草雑解き捨つるより、花月の札とりし、すり足の立ち振舞ひ、是をちやつた世の中となん心ある人は云ひける。

○（原注）一段は論語の郷党篇を以て書けりと見ゆ。

○（原注）千家の鑑を得、くだらぬ銘などせらるる、これを書付物といへり。

〔注〕①利休下駄＝利休ごのみの下駄。杉台に竹皮の鼻緒をつけた庭下駄。

②仲瀬＝仲仕に同じ。米俵などをかついで運ぶ人夫。

③花月の札とり＝表千家流にある茶道の遊戯の一つに「花月」がある。一定の人数が香札で抽選し、花に当った人を主人、月に当った人を上客と定めて、先ず主人が点茶の用意をし、そのまま折居を上客にすすめて自分は詰（最後の客席）に着く。次に客は又香札によって抽選を試み、花に当った人が点茶する。再び折居を剋して月に当った人が茶を飲み、花の人が立って点前に代り、こうして三度くりかえして終るのである。

④ちやつた世の中＝茶という名詞を動詞的に使って洒落れた世の中、又は、ふざけた世の中に通わしたと見える。或は「戯」を活用したものか。

〔補説〕①猫も杓子もえせ茶道に没頭して夢中で騒いでいる世の中を冷やかに笑ったのである。

②一体、秋成自身は大の茶の湯党で、というより寧ろ茶を唯一の趣味とし慰安としたもので、六十才で京都へ移ってからは、居を知恩院の門前に卜して、友人村瀬栲亭と共に煎茶の普及に努め、寛政六年（1794）には茶道の要を説いた「清風瑣言」二巻を刊行した。その上陶工の六兵工に自分の趣味に合うような茶器を作らせたり、又、自分でも土をこねて茶器を製したりした。そんなことが五・六年つづくうちに、煎茶道が都にも田舎にも普及し、彼れの手製の茶器の如きは数十両に価するようにまでなった。このように彼れは茶道で一家を成し、茶道に対する自負と見識とは、相当以上に持ってい

て、随分広言も吐いているが、一方には、茶道が広く普及せられるにつれて次第に俗塵にまみれて行くのに堪らない嫉忌の感を抱くようになった。

○文人・茶人・財主、臭気不レ可レ対。（墨書）

茶人と財主とを並べてその臭気に鼻をつまんだのは、下手な道具立てをしたり、大袈裟に茶式を催したりする自称茶人が癪にさわったのである。本書の第一段に「小借家住みの茶の湯振舞」を小癪がり、第二段では生臭坊主が得意顔にする当世茶の湯を愧笑し、第四段では遊女屋の息子が茶の湯に凝るのに長大息しているのも、すべて彼れ一流の排俗主義にもとづくのである。

③彼れの理想とする茶風は、全く自然を尊んだもので、超俗的な、隠遁的なそれであったようだ。この意味から点茶よりも煎茶が自然だと称して、大がかりな茶式や、高価な道具立てなどは全く好むところでなかった。

○すべて器物は分限に応じ有るに任すべし。
豪富の家には珍奇を捜し求めて奢靡の情をほしいままにす。山林の士は清廉を嫌はず、効用清潔を専らとえらぶべし。
（清風瑣言）

○点式点茶は見るに目痛し。その立居も常に異にて能狂言見るよと思ふなり。……茶は好みて飲めかし。市中の礼服つけて茶席を喜ぶは、客主ともに小児の輩なり。（胆大小心録）

などと言っているのでも、ほぼ彼れの主張を知ることができよう。

④この茶道に対する趣味は、晩年にいたって遂に癈残の彼れを慰めるただ一つの慰安となり、彼れは全く茶に溺愛の形であった。

○嘘われ老いぬ。何玩びて世には在らんとする。眼痛み病みては、書読み、言えらびせん事の難くもあるか。さらば野山に出でまじりなんには、杖つきたがへて転ぶべし。酒若きより忌々しく、茶こそ久しき友なりしを、是だに、色を誤り味ひをさへわいだめぬは、此友にだに疎まれぬることよ。
（大館高門に答ふ）

○麦食たり焼米の湯飲んだりして、惜しからぬ命は生きる事じゃが、書林が頼む事をして、十両十五両の礼を取って十二三年を過したが、もう何も出来ぬ故、煎茶のんで死をきはめている事じゃ。（胆大小心録）

⑤こんなに茶に徹して来ると、随って世俗のえせ茶の湯が癪の種子になると共に、彼自身過ぎこし方の斯の道に対する態度にも、少なからぬ不満―しかも是れは棄て去ることのできぬ苦い滓をすするような痛々しい悔恨の念がきざして来たことであった。屋敷の大館高門が陳昌其の「茶略」という書を出版しようとして、清書の閲覧を秋成に乞うた時、之に答えて、

○吾も十歳ばかり古へ、人に誘はれてかかる似たる賢しらして、二とちのいたづら言（三沢注、清風瑣言を指す）を世に誇らしくせし、思へば思へば取りかへさまほしきをば、後思ひ合せよかし。（高門に答ふ）

と懺悔し、

○昔は此の遊びにふけりしかど、今は烹るついでをさへに忘れては、此書ゑらせて行はるるも嬉しからずなんある。若き人よ、我言にあらず、よく聴きて心とせよ。（同）

と苦言を呈し、更に、

○ふけるは良からず、狂ふに至りては何事もおのれを損ふべし。

あなかしこ、ゆめゆめ。（同）

と戒めているのは、晩年の彼れの心境を切実に告白したものというべきであろう。

彼れの茶道に対する心境は以上の如くであるが、前にも述べた通り、とにかく彼れは煎茶道の大家である。清風瑣言の著者である彼れが、世俗の茶をののしった文としては此の「一天下こぞりて」云々は少なからず物足らぬ感がするが、思うに是れは彼れが茶道に有名になる前の筆だからであろうと察せられる。

⑥原注にもある通り、この一段は「論語」の郷党篇に筆法を擬している。

○……魚の餒（たい）して肉の敗れたるは食らはず。色の悪しきは食らはず。臭の悪しきは食らはず。……割（きりの）正しからざれば食らはず。……食ふに語らず。寝ぬるに言はず。……席正しからざれば坐せず。（郷党篇）

—第七段、終—

書籍と雑誌は

甲南堂

省線本山駅山側
電話⑧五七〇〇

研究室だより

三十四年六月十四日

国語国文研究部の主催で、古典文学研究旅行を、京都の「嵯峨野めぐり」として行った。コースは、嵐山―天竜寺―常寂光寺―野宮―落柿舎―二尊院―祇王寺―滝口寺―念仏寺―清涼寺―大覚寺で、参加学生は二十名であった。指導、鈴野教授。

〃　七月一日

第二回卒業生の卒業研究報告発表会は、新築の合同講義室で行った。発表者は左の通りである。

「怪異の位相から観た雨月物語」　三上紀美子
「戯曲における卜書きの研究」　正木釉子
―泣きと笑い―
「兵庫県宍粟郡方言の研究」　村上詢子
―語彙・アクセント―
「国木田独歩とワーズワース」　清水道子
―「春の鳥」を中心に―
「論語」における「君子」について　治田文子
「近松の女性」　浅井麻規子

〃　七月十四日～七月十七日

近代文学ゼミナールでは、恒例の藤村文学研究旅行を行った。コースは木曽馬籠から浅間山麓の小諸、そして蓼科高原へかけてである。参加学生は家政科の有志も入って五十八名。指導、垣田助教授。

〃　八月十九日～八月二十三日

国語学の「方言学」ゼミナールでは、佐用郡、宍粟郡に続けて本年は養父郡の方言調査を行った。郡下八地点を音韻、アクセント、語彙、語法を分担し学生三名と鍛田講師、山内助教授が参加。

〃　十一月三日

本学第二回文化祭に、国語科及び国語国文研究部は恒例の国語科展を左記により行った。

「奥の細道紀行展」　国語科一年
「阪神地方古典文学展」　国語科二年
「小倉百人一首展」　国語国文研究部

〃　十一月十九日

一、二年合同で万葉旅行を行った。コースは板上―斉明陵―真弓丘―草壁皇子墓―檜隈川―壺阪―神武陵―橿原歴史館で、参加学生五十五名。指導、吉水講師。

〃　十二月十六日

言語学、国語音声学研究のため県立聾学校淡川分校、市立盲学校を見学、二年全員と一年有志、引率指導山内助教授、鍛田講師。

〃　十二月十七日

本年度の学会総会を新館合同講義室で左記により行った。

公開講演
「源氏物語について」　大阪女子大学教授　玉上琢弥氏
「文学的人生論」　作川白川湿氏

三十五年一月二十日

「卒業研究報告」を提出し終った。